

## 資料 山之口獺：「行動」「四季」「批評」「人民文庫」「詩原」への投稿作品

松下，博文  
筑紫女学園短期大学

<https://doi.org/10.15017/10396>

---

出版情報：文献探究. 26, pp.9-22, 1990-09-30. 文献探究の会  
バージョン：  
権利関係：



# 資料 山之口貌

「行動」「四季」「批評」「人民文庫」「詩原」への投稿作品

松下博文

はじめに

昭和四十三年一月から四十八年八月にかけて小田切進編著「現代日本文芸総覧」全四巻が刊行された。この総覧は大正から昭和にかけての文芸や思想関係の主要雑誌約百四十誌を選択してそれぞれの細目を編集し、更に、適切な解題を付しているものであって、利用価値はきわめて高く、わたしたち近代文学研究者にとって誠に便利で貴重な情報がストックされた雑誌のデータバンクと言える。今回紹介する資料はこれによって知り得た情報である（註1）。

ただ、残念ながら昭和十一年十月号「批評」に掲載された「『母岩』のこと」はここに蒐集できなかった。この資料は今回初見の資料であり、むしろ、思潮社版「山之口貌全集」には未収録の作品。関係者の協力を仰いで後日その機会を俟つことにしたい。また、列記した雑誌も初見のそれであり、管見のかぎりこれについての貌の発言を、わたしは、知らない。以下、当総覧によって蒐集した貌の作品およびその所載雑誌について若干の説明を加えたいと思う。その場合、資料の性格上、昭和十年前後を叙述の中心に定めたい。なお、「人民文庫」昭和十二年七月号に発表された「土族」には初出本文と既刊詩集収録本文との間に多少の本文異同が見られたため本稿末尾に両者を並載することにした。

## I 昭和十年前後

筑摩書房版「現代日本文学全集」の「月報」（昭和34年4月・98号）には中村光夫・臼井吉見・平野謙による「座談会「現代日本文学史」を書きおえて」が収められている。これは全集の別冊として「現代日本文学史」を担当した三人がどこに力点を置いて文学史を書いたか、あるいはどこに苦心したか、その舞台裏を暴露するという企画だが、昭和文学史を執筆した平野謙は中村と臼井の質問に対してこのように答えている。

臼井　そこで昭和ですが、平野さんのいちばんの重点は、十年ころまで——昭和初年代ということ……。

平野　昭和十年前後。特別に「昭和十年前後」を設けたわけですよ。明治で言えば明治四十年代というもので、ここにいろいろ問題があつて、ここをどういうふう整理するかということが、ばくとしてはいちばん眼目でやつたんですが、うまくできなかったんです。

中村　いちばん苦心されたところはどこですか。（笑）

平野 つまり歴史にならないですよ。たとえば「昭和十年前後」

になれば、中村光夫っていう人も歴史的人物で登場するわけで、それを評論じやなく歴史に書くっていうことはむずかしいことだな。全然できないと言っていることはむずかしいことだ。論にならないようにして、とにかくそういう歴史的な恰好をなるべくつけたいと思いがらううまくできなかったっていうことですよ、一口に言うと。

中村 平野さんが苦労しているところはそこだろうと、百瀬君にも竹西君にも言っている。

平野 それは知己の言だな。(笑)

中村 明治の人でも死んでる人と生きてる人とは書き方が違う。きみのはみんな生きてるんだからな。

臼井 全くそうだな。

中村 この間、林健太郎っていう人が書いたものを読んだら、歴史家は倫理的判断と歴史的判断っていうのは違うっていうことを言うんだそうだな。林さんのこれも例だけど、ヒットラーはまだ倫理的判断しかできない、ヒスマルクは歴史的判断の対象になる、と。

平野 そりやあそうでしょうね。スターリン主義は歴史的判断にはいらないけど、フランス革命は歴史的判断にはいる、と。ぼくのところは倫理的判断のとこばかりだね。(笑) 実際困っちゃった。

中村 賄賂はどつからもこなかったかね。

平野 こなかった。(笑) ただ、やつぱりね、横光利一とか小林秀雄とか、片っ方で言えば中野重治とかいうような人たちの全

体としての評価の仕方っていうのは、不安定のまままで書いたわけですよ。今でも不安定のままですが。「昭和十年前後」でいちばん問題になるのは、あのころ「文藝復興期」と言われたでしょう。「文藝復興期」をどう理解するかということですが、佐々木基一君にしても、橋川文蔵君にしても、江藤淳君にしても、あそこをみな焦点を合わせて、そこから戦後の問題をもう一べん引き出そうという動きが若い批評家の間にあるわけでしょう。それを参酌しながらというので、書きにくかったわけですね。結局、佐々木基一君なんかは小林秀雄の役割を反動的なものにして見てるんですが、ぼくなんかの理解するところによると、プロレタリア作家同盟は昭和九年になくなって、プロレタリア文学も満洲事変から日華戦争までの間にだめになってるわけですね。その時に小林秀雄さんなんかは、マルクス主義文学が日本にもたらしたプラスをはつきり確認して、その上に立って現代文学の混乱を打開してゆこうという気持ちになったとぼくは思うんですよ。そういう評価の仕方は甘いという評価があるわけですよ。なくなつたからこそ大いに顕彰してやるんだという評価の仕方がそこにあつて、どうもそういうふうには言い切れないと思う。ある時期にいいことを言つた人がたくさんいるわけですね。たとえば林房雄なら林房雄が、昭和七年に監獄から出てきて、当時のプロレタリア文学に対して適切な意見を言うわけですよ。今から読むと実にいいことを言ってるんですよ。ところが、昭和十年代の林房雄の行動とか戦後の林房雄の行動はわかってるわけですね。そこから逆に照明して、こっちから見れば、

ああいうことは言っただけでも・・・という取扱いは疑問  
なんですよ。(中略)。

中村 「昭和十年代」で「日華戦争下の文学」「太平洋戦争下の文学」という区分はどうですか。(笑)

平野 昭和十年代は社会的なものに、よかれあしかれ文学は影響されたので、窮余の一策としてこういうふうをやったんですけどね。つまり昭和十年代になりますと、文学思潮内部の移り変りによる分け方がうまくできないので、こういうふうになりました。昭和二十年代も同じく「占領下の文学」「マス・コミュニケーション下の文学」というふうにやったわけです。

およそ、昭和文学史を昭和三十四年に書くという行為はまったく無謀な行為である。昭和も六十年を優に過ぎて「平成」と改元された今日の視点から見ても平野の試みがいかに無謀であったか、自明であろう。が、おそらくこの時期にかれは、己の生き方を見つめ直すために、生きてきた五十年の生きざまと、生きている現在の生きざまと、批評家としての己の生きざまと、「政治と文学」や「純文学の変質と崩壊」などの現実的命題を視野に入れながらすみやかに再確認する必要があった。平野が「昭和十年前後」という時代区分にひたすらこだわったのも平野にしてみればこの時代がかれにとって「文藝復興期」という既成の文学史用語では総括できぬ別格の時期であったからであって、かれの思想の基底に二十代にかかわっていたプロレタリア文学や転向文学の問題が根強く巣くっていたからでもあり、そのことを抜きにしては己の精神史ましてや昭和の精神史の一端としての文学史など絶対に書けぬと思っていたからである

う。そしてこのことこそが平野を昭和文学の史述にかきたてた、おそらく、大きな力であった。かれの文学史が今もなおひとときわ鮮烈な印象をわたしたちに与えるのは、かような、かれの、強固な精神性に由来する。

だが、三十余年の文学を叙述するということはそうたやすいことではない。平野もいうように現在生きて目の前にいる作家に対して〈歴史的判断〉を加えて叙述することは限り無く不可能に近いからだ。ここでは対象は常に宙づりの状態になっているし、ましてやそれを論じる評者の視点はいっこうに安定しない。

〈そこで昭和ですが、平野さんのいちばんの重点は、十年ころまで——昭和初年代ということ・・・〉という臼井の問いに対して平野は〈昭和十年前後〉とキツパリ答えてはいるものの〈ここをどういうふう整理するかということ〉が、ぼくとしてはいちばん眼目をやったんですが、うまくできなかったんです〉という素直な告白はいまだ対象を相対的に評価するに足る十分な歴史的時間が経過してはいないことを意味する。それは今日から見れば同時代のなかで懸命に生きてきた平野の、時代があまりに近すぎて見えすぎたためにその「見えすぎる目」が逆に混乱を招いた「人災」であったかも知れない。が、思いどおりに書けなかったにしても、やはり、割いているページの割合から見た場合、第一章「昭和初年代」と第二章「昭和十年前後」は七十ページ前後、第三章「昭和十年代」は二十ページ余、第四章「昭和二十年代」は十ページという割合であって量的に見ても「昭和初年代」と「昭和十年前後」にかれがいかに大きなエネルギーを注いでいるか明らかである。そういうえばこれを溯ること三年前の昭和三十一年四月には荒正人・久保田正文・佐々

木基一・本多秋五・山室静らの「近代文学」同人とともに角川文庫版「昭和文学史」上下二巻を分担執筆していた。

平野の叙述はおおむねこの文庫本の延長上にあつて（『現代日本文学史』の「あとがき」には「昭和十年代の歴史の叙述は、執筆中の病氣などのため、「昭和文学史」（角川文庫）のなかの私の文章に添削を加えたものであります」とあり、実際、内容を見ると文章の重複が多く見受けられる）、たとえば、上巻では第一章「昭和文学の概観」・第二章「昭和文学の特徴」・第六章「戦時下の文学」を執筆しているのだが、その記述の中心は、むろん、昭和二十二年十月号「人間」に発表した「昭和文学のふたつの論争」中の昭和文学史の三派鼎立説——昭和十年頃までの近代文学の実質は従来のようなブルジョワ文学／プロレタリア文学という二派対立の關係構図としては把握できないとし（自然主義・私小説とつゞく既成リアリズム文学（既成文芸派）と、そのような伝統的なりアリズム文学を技法的に革新しようとする文学的傾向（新感覺派・新興芸術派）と、イデオロギイ的に克服しようとする文学運動（プロレタリア文学派）との三派鼎立として眺められねばならぬ）——とするかれ独自の文学史観に則している。しかし、かような文学史観の線上には前述の「文藝復興期」の問題がひとつのアポリアとして平野の前に屹立していた。

へ「昭和十年前後」でいちばん問題になるのは、あのころ「文藝復興期」と言われたでしょう。「文藝復興期」をどう理解するかという点ですが、佐々木基一君にしても、橋川文蔵君にしても、江藤淳君にしても、あそこにみな焦点を合わせて、そこから戦後の問題をもう一べん引き出そうという動きが若い批評家の間にあるわけ

でしょう。それを参酌しながらというので、書きにくかつたわけですね。この平野の告白はかかる難問の所在を鮮やかに語ってくれているし「文藝復興期」の問題が、実は、かれにとって、存命中の作家に（歴史的判断）を下して叙述することと同様に、いや、それ以上に、極めて困難な問題であつたことを証明してくれている。これはかれが「文学史」という史的叙述を単に過ぎ去つた過去の歴史的叙述という視点では捉えていないことを一方で語つて見せたことにもなる。明らかに、かれは、佐々木基一や橋川文蔵や江藤淳らの現在のな思考的磁場まで、戦後文学の原点として、言葉を換えていえば将来の文学を透視しようとする目で復興期の文学を考察して見ようとしていた。では、平野のいう昭和十年前後とはどのような時代であつたか。

昭和五年十一月十四日朝、特急「燕」に乗り込もうとした浜口雄幸首相は東京駅で右翼の暴漢に狙撃され腹部に重傷を負つた。現職首相がテロの手にかかったのは大正十年十一月四日に同じ東京駅で政友会総裁原敬が十八歳の中岡良一に刺殺されて以来のことである。この襲撃事件を皮切りに翌年三月には宇垣一成内閣樹立を企んだ橋本欣五郎および大川周明ら陸軍急進派將校によるクーデターが決定され、更に、同年九月には関東軍参謀の謀略による南滿洲鉄道線路爆破事件に端を発した滿洲事変が勃発した。以後、昭和十五年までの約十年間は日本の近・現代史を通じて明治維新と敗戦を除けば嘗て経験したことの無い波乱の時代となつた。

たとえばこの間の主な事件を羅列すれば、昭和七年五月十五日の海軍青年將校による犬養毅首相射殺事件、皇道派青年將校約一五〇〇名による同十一年二月の二・二六事件、あるいは日中戦争の開始、

国家総動員法公布、国民徴用令公布、第二次世界大戦開戦など激動の昭和を象徴するかのような多くの事件・クーデター・法令が立て続けに発生している。かような社会状況が文学に強い影響を及ぼすのは当然のことであろう。昭和八年六月九日に日本共産党最高幹部の佐野学と鍋山貞信が獄中から発した「共同被告同志に告ぐる書」による共産主義思想の放棄と天皇制に対する絶対的忠誠はその最たるものであろう。強権による思想弾圧と文学のファッショ化の到来である。かような事態はそれまでの文壇の主流であったプロレタリア文学を一時のうちに奈落の底に突き落とし、小林多喜二の無惨な獄死はいうに及ばず、いわゆる多くの転向作家を輩出させることとなるが中野重治・村山知義・立野信之・藤森成吉・窪川鶴次郎・徳永直・島木健作・高見順などはさしずめその代表的な作家と言える。と同時に、様々な文学的事象がこの時期に集中的に現れる。先に言う「文芸復興」がそれだが、宇野浩二・谷崎潤一郎・永井荷風・島崎藤村ら大家の復活や島木健作・丹羽文雄・石坂洋次郎ら新人の登場や、あるいはまた「文学界」を初めとする諸雑誌の相次ぐ創刊や更には芥川賞・直木賞など諸文学賞の設定など、昭和文学を叙述するにあたって平野も多くを問題にするような多様な動きがこの時期には出現していた。なかでも雑誌の爆発的な発刊はこの時代の最も強烈な起爆剤と言えた。

## II 掲載誌について

昭和10年9月号「行動」……………「食ひそこなつた僕」「光線」  
昭和11年6月号「四季」……………「大儀」

昭和11年10月号「批評」……………「母岩」のこと」  
昭和12年7月号「人民文庫」……………「土族」  
昭和15年3月号「詩原」……………「炭」

昭和八年以降数年にわたって近代文学史上稀に見る多くの文芸雑誌が刊行される。「文学」「文化集団」「文学界」「行動」「文藝」(昭和八年)、「文学評論」「詩精神」「現実」「文芸街」「四季」(同九年)、「日本浪漫派」「歷程」(同十年)、「批評」「人民文庫」(同十一年)などはその代表的なものであるが山之口巖はまさにこのような雑誌に自作を発表していた。一面でそれは「文芸復興」を生ま身に体験しその空気を全身で呼吸していたことを意味する。上記の一覧は見事にそれを証明しているであろう。ただ、どのような経緯でかのような雑誌に投稿するようになったか今のところ投稿掲載の経緯を知ることはできない。

「行動」は昭和八年十月から十年九月まで株式会社紀伊屋出版部から出版された(「食ひそこなつた僕」「光線」は終刊号掲載作品ということになる)。出資者の田辺茂一は創刊の経緯をこのように話している(註2)。(創刊に当って、船橋聖一、阿部知二、雅川澗(成瀬正勝)らの三名と相談し、「行動」という名の名づけ親は、阿部君であったことに間違いはないが、実情をいうと、書店とは別に、出版部は出版部として別に組織しようと、株式会社紀伊屋出版部なるものを作り、資本の額は今は忘れたが、大半というより殆んど、私が出資し、名義上の株主、重役を、船橋、阿部、雅川、それにその頃親しかった画家の野口弥太郎を一枚加え、私が社長になったのである。つまりその出版部から「行動」は創刊されたので

ある。編集長に人がなく、ドイツ文学の伊藤緑良さんの推薦で、同人誌「カオス」の同人だったドイツ文学出身の、豊田三郎君がやってきた。そのときが、私と豊田君の初対面であった。創刊当時は、新宿の書店の奥二階にあった、八畳間ほどの洋間の私の社長室を解放し、編集一名、経理一名、広告取り一名、つまり三人だけであった。毎月の編集方針は、船橋と私と、それに編集長の豊田君とで凝議した。

誌名は阿部知二の命名によるという。創刊号「編輯後記」には創刊の意気込みがへ何といつても僕達の希つて止まないには、この雑誌から直接間接にわが国の新しい有力な文学が生れてくることなのだ。即ち若い時代に呼かけて、彼等の文学運動を援助することに外ならぬ」と書かれていて雑誌創刊の目的が政治偏重のプロレタリア文学に取って変わる新しい文学への期待と新進作家たちの助力育成にあったことが理解される。が、それ以上にわたしたちの興味を引くのは「行動」が実質的に行動主義文学運動の機関誌的な様相を呈し文壇の流行たり得てきたことである。

「行動主義文学」とは一九三〇年代にフランスで生じた反ファシズム運動に刺激を受けた小松清が「改造」昭和九年六月号にラモン・フェルナンデスの「ジイドへの公開状」を訳載したのに始まる。その主旨は芸術の創造とそれを創り出す現実社会とが甚だ乖離してしまつた現状への憂慮と芸術的創造意欲の沈滞している文壇に活力を注ぎ込むことであつた。かかるかれの主張は、以後、「アンドレ・マルロオと行動の文学」（「セルバン」昭和九年七月）「仏文学の一転換」（「行動」昭和九年八月）「超現実主義とその前後」（「行動」昭和九年十月）「行動主義理論」（「行動」昭和十年一月）

などの一連の文章によって喧伝され文学に於ける能動精神の高揚を促すことになつたが、しかし、かような文学運動の流行ははたして「行動」を主要舞台に出発したのではなく、むしろ、前に引いた「改造」などの外部雑誌からの刺激を受けたものであつて（行動）または（能動）という言葉の流行とともに雑誌「行動」が時流に乗じていったというところがその実相である。船橋聖一「ダイヴィング」「濃淡」・豊田三郎「弔花」・福田清人「脱出」・芹沢光治良「塩壺」などはこの期の代表的作品である。「食ひそこなつた僕」「光線」と同時に終刊号を飾つた主な作品を列記しておこう（註3）。佐々弘雄「現代政党論」・森山啓「ヒューマニズム及び文藝復興と現代」・小松清「映画レアリズム小論」・板垣直子「中堅作家論」・井上友一郎「反対党」・船橋聖一「濃淡」・中村地平「失踪」・横光利一・阿部知二・船橋聖一「横光利一文学談」。

「四季」は一般に第一期（昭和八年五月〜七月全二冊・四季社）、第二期（昭和九年十月〜同十九年六月全八十一冊・四季社）、第三期（昭和二十一年八月〜同二十二年十二月全五冊・角川書店）、第四期（昭和四十二年十二月〜現在・潮流社）に分けて考えるのが普通。「大儀」が掲載された号はなかでも全盛期とされる第二期のそれであつて同号には中島健蔵「詩の勃興に就いて」・辻野久憲「ラッポオの味爽」・田中克己「春のわかれ」・津村信夫「『外はお寒むいです』」・竹村俊郎「谿間」・中原中也「獨身者」・小高根二郎「後朝喪失」・山村西之助「黎明の歌」・立原道造「旅人の夜の歌」・神保光太郎「春」・萩原朔太郎「文学的といふことと、常識的と言ふことの別」・三好達治「燈火言」などの作品が発表された。同号「後記」には次のような文章が神保光太郎によって書かれてい

る。へ竹村俊郎氏が久し振りで詩を寄せられた。その他、詩の寄稿家、山之口、山村、小高根緒氏はいづれも敬愛するわれわれの友である。獺が当誌に寄稿したのはこれが一度きりであり、思うに、かれの作品が「四季」派の伝統的美意識に則った知的抒情に流れる作品ではなく、むしろそれとは逆の、同時代の一方の雄であった草野心平を中心とする「歷程」のような庶民的な日常感覚に則したそれであったことをこの際十分視野に入れておくべきであろう。

「批評」は昭和十一年七月から十二年十一月までに平野謙・山室静・本多秋五らのちに「近代文学」に集う評論家たちが中心になって刊行した全十冊の同人誌である。知られるように吉田健一・中村光夫・伊藤信吉らが参加した昭和十四年創刊の「批評」とは全く別のものであって創刊号から山室静が意欲的に文芸時評を連載し、平野謙が松田康雄というペンネームで久板栄二郎の「断層」について論じ、本多秋五が北川静雄の名で小説「日常」を発表して、以後、本多の「村山知義論」や平野の「高見順論」などの重厚な転向文学論が掲載されるに至った。これらのメモバーは嘗てはプロレタリア科学研究所や明治文学談話会に属していた人々であってプロレタリア文学運動の重苦しい重圧をくぐりぬけながら個々の内面の課題を評論に託して登場してきた人々たちである。他に池田壽夫・藤原定・中條百合子・新島繁・本庄陸男・小田切秀雄（織田英雄）・佐々木基一（青木文象）・仲賢禮（木崎龍）らもここに参加していた（註4）。平野の文章を次に引こう（註5）。

（私どもの「批評」の業績としては、山室静が連載した文芸時評を第一にあげなければならぬ。山室の文芸時評がどんな文壇的反響をもたらしたか、私はそんなことにはまだ気がまわらなかつたが、

当時新聞や雑誌に発表されたおおかたの職業的な文芸時評より立派だったことはたしかである。山室は一方では石川淳や神西清らの作品をいちはやく認めるとともに、他方中野重治の「汽車の罐焚き」のヒューマニズムを、「人間の回復」として推奨したのである。それらの柔軟な時評は、過去のマルクス主義藝術理論からはほぼ完全にぬけだしていた。ほかに山室は川端康成、嘉村磯多などの作家論も試みたが、それらの仕事ぶりを中心として、「現在における文学の立場」という第一評論集を赤塚書房から出版した。もしも山室がその後も文芸時評の筆をとりつづけていたら、ひとりのユニークな文芸評論家が昭和十年代に誕生したにちがいない。（中略）「批評」の第二の業績として、本多秋五の小説「日常」と「村山知義論」とをあげてもいいだろう。「日常」は創刊号に掲載されたが、当時本多は故郷に帰っていて東京にいなかつた。発表された「日常」をかりに三十枚くらいとすれば、たしか初稿は五十枚ほどあつたはずである。その初稿を本多は国の方から送ってきて、発表にさきだつて私に批評を求めた。なんと批評したか私は忘れてしまつたが、遠慮のない否定的な批評だつたにちがいない。上京してきた本多はいかにも残念そうな口調で、平野の批評はあつたつて、といい、平野の書いたものなかで、いちばんいい、といつた。よほどくやしかつたものとみえる。しかし、そこが本多の感心なところだが、私の評言にしたがつて、「日常」を書きあらため、書きちぢめたようである。のちに本多は、平野の評をマにうけて、書きなおしたばかりに、まるで骨ばかりの作品になつてしまつた、というような嘆きを嘆いていたらしい。いまよみなおしてみると、これは本多なりの「村の家」だつたことがわかる）。



山室は第七号を除いてその他全てに投稿したが平野も指摘するように第六号には「川端康成氏私見」、第九号には「嘉村磯多の場合―現代と私小説―」などの作家論も執筆しこれらは纏められて昭和十四年に「現代の文学の立場」というタイトルで赤塚書房から出版された。例のように「『母岩』のこと」と同時に掲載された主な作品を挙げておこう(ちなみに「『母岩』のこと」は「本の頁」の欄に木崎龍の「『戦へる女』―室生犀星全集第一巻―」や山室静「―意志の悲劇イブセンと彼の創造―」ラヴリン―」などとともに掲載されているようだ)。池田壽夫「知性の倫理―中島健蔵氏『現代文芸論』の批判を中心として―」・佐藤年寶「若者の意気―へこたれ文学の克服―」・北川静雄「無抵抗」・山室静「文芸時評―第三回―」・松田康雄「なすなし」。

「人民文庫」は昭和十一年三月に創刊され十三年一月に廃刊されるまで臨時増刊の「現代代表作全集」二冊を含めて計二十六冊が刊行された。この雑誌の特徴を嘗て高見順は亀井勝一郎や保田与重郎らが参加した「日本浪漫派」と並べて(転向といふ一つの木から出た二つの枝)であると評した(註6)。その主宰者は「日本三文才ペラ」(銀座八丁)でときの流行作家となっていた武田麟太郎である。雑誌創刊の動機はかれの周囲に集まった若い作家たちに活動の場を与えたいということの他に、時局に便乗してきた諸雑誌、特に自らも執筆していた昭和八年創刊の「文学界」への反発や同じ「文学界」の同人であり当時次第に日本主義に傾倒しつつあった林房雄への強い反発などにあったようである。換言すれば、文壇や個人も含めた軍国主義的文化統制や超国家主義的伝統主義(「日本浪漫派」など)への旺盛な批判精神が雑誌創刊の強力なバネになっていたと

見てよい。

ところで、この雑誌は同人制ではなく雑誌執筆グループがあつてこのグループの作家たちが武田のもとに寄稿するようになっていた。(運営にあたっては武田が出資し経営の全責任を持っていた)。創刊号には以下の人々が執筆している。荒木鏡「生きんとする兩人」・新田潤「癌」・平林彪吾「ホテルの狂言」・矢田津世子「神楽坂」・青野季吉「知感記」・江口渙「ロマンテイツク・リアリズム―アレキセイ・トルストイのエッセイについて―」・秋田雨雀「トルストイの未発表日記『一九一〇年』を読む」・高見順「故旧忘れ得べき」・武田麟太郎「井原西鶴」。

高見順の「故旧忘れ得べき」は当初は昭和十年二月の「日曆」第七号から同年七月の第十一号までに連載されていたものであり「人民文庫」創刊と同時に創刊号から第七号までに継続連載された小説である。また、武田麟太郎の「井原西鶴」も初めは同じ一・二・三・五・六・九号にそれぞれ掲載されていたが、のちに昭和十二年の九月臨時号に纏めて改作掲載され、更に、翌十三年七月号「文藝」に「発端篇」という形でその定稿が再録されることとなった。「土族」と同時に掲載された主要作品は次のとおりである。酒井逸雄「『汽車の罐焚き』の提起する諸問題―リアリズムの行衝を現代文学の中に探る―」・那珂孝平「正直な人々」・波川曉「詩精神と散文精神」・草野心平「海」・武田麟太郎「病床録」・徳永直「僕の黒板」・さくら「『植物』『飛行機』」・本庄睦男「省線電車」・高見順「青眼白眼」・矢田津世子「地主」。その他、立野信之・円地文子・田村泰次郎・井上友一郎・金子光晴らの作品も誌面を飾った。

最後に「詩原」について説明しよう。管見の限り「現代日本文芸

総覧」の「解題」が唯一の情報なのでそれをまず全文掲載しておく。

（「詩原」は昭和十五年三月、赤塚書房から発行された第二次大戦前の最後のアナーキズム系詩人たちの雑誌だった。すでに「一定の色彩はない。各人各様」の詩誌だ、と創刊号「編輯後記」にことわらなければとても発行できない時代になっていたわけだが、壺井繁治・大江満雄・小野十三郎・倉橋頭吉・岡本潤・金子光晴・青柳優・秋山清・山之口貌・田木繁・江森盛弥・永瀬清子・山本和夫・中野秀人・池田克己らが寄稿、小堀基二訳のハイネ「アツタ・トロール」が二号にわたって掲載されている。太平洋戦争がはじまる直前の時代で、もう詩人たちの反逆も影をひそめているが、アナーキズムの詩人たちの抵抗の姿勢ははっきりうかがうことができる。菊判六十ページ前後で定価三十銭。編輯兼発行人は東京市中野区上高田一ノ二七七伊藤方の伊勢八郎、発行所は東京市小石川区菟籠町五の赤塚書房。二号の表紙を松山文雄、カットを細野孝二郎が描いている。四月にすぐ二号を発行し、この二号までで消滅したものとみられるが、未確認）。

その後雑誌の発掘が進んだらしくわたしの手許にある昭和五十六年九月発行の『日本近代文学館 所蔵主要雑誌目録』（財団法人・日本近代文学館発行）によれば同年四月現在、近代文学館には当誌一卷六・八・九号および二巻一〜六号が所蔵される。しかし、これらの所蔵誌には残念ながら貌の作品は掲載されていない。「炭」が掲載された創刊号の目次全てを列挙しておこう。壺井繁治「詩と言葉の問題」・大江満雄「飛行家と詩人」・小野十三郎「詩四篇」・倉橋頭吉「みぞれふる」・岡本潤「酒場にて」・金子光晴「詩評」・青柳優「文藝評」・直木龍「時代の詩について」・秋山清「幼稚な

夢」・山之口貌「炭」・壺井繁治「詩の屑籠」・田木繁「海辺詩集」  
・小堀基二訳「アツタ・トロール（ハイネ）」・江森盛弥「小野十三郎と詩集『大阪』について」。

### Ⅲ 掲載作品について

「食ひそこなつた僕」

僕は、何を食ひそこなつたのか！

親兄弟を食ひつぶしたのである

女を食ひ倒したのである

僕をまるのみにしたのである

どうせ生きたい僕なんだから

何を食つても生きるんだが

食へば何を食つても足りないのか

いまでは空に背を向けて

物理の世界に住んでゐる

泥にまみれた地球をかちつてゐる

地球を食つても足りなくなつたら

そのときは

風や年の類でもなめながら

ひとり、宇宙に居のこるつもりで

ゐるんだよ。

「光線」

一文もない、と彼は言ふ  
あつても健康なものにはもう貸さない、と彼は言ふ  
さうして僕のかんがへは  
借りるつもりで来たんだらう  
借りると貸ったつもりになるんだらう  
貰つたらまたも借りるつもりになつて来るんだらう  
さうして僕の肉体は  
どこからみても健康か  
恥を被つてゐると眩しくなつて  
目蓋を閉ぢたがなほ眩しい。

「大儀」

躰づいたら転んでゐたいのである  
する話も咽喉の都合で話してゐたいのである  
また、  
久し振りの友人でも短か振りの友人でも誰とでも  
逢へば直ぐに、  
さよならを先に言ふて置きたいのである  
あるひは、  
食べたその後は、口も拭かないでぼんやりとしてゐたいのである

すべて、  
おもふだけですませて、頭からふとんを被つて沈澱してゐたいの  
である  
言ひかへると、  
空でも被つて、側には海でもひろげて置いて、人生か何かを尻に  
敷いて、膝頭を抱いてその上に顎をのせて背中をまるめてゐたい  
のである。

「炭」

炭屋にぼくは炭を買ひに行つた  
炭屋のおやぢは炭がないと云ふ  
少しでいゝからゆづつてほしいと云ふと  
あればとにかく少しもないと云ふ  
ところが実はたつたいま炭の中から出て来たばつかりの  
くろい手足と  
くろい顔だ  
それでもなければそれはとにかくだが  
なんとかならないもんかと試みても  
どうにもしやうがないと云ふ  
どうにもしやうのないおやぢだ  
まるで冬を邪魔するやうに  
ないないばかりを繰り返しては  
時勢のまんなか立ちはだかつて来た  
くろい手足と

くろい顔だ。

ほぼ初出どおりに掲載した（ただし、旧字体は新字体にかえ、旧かなづかいはそのままにし、また、行がえは一応既刊詩集を参考にしているが都合上多少不揃いなどところもある）。羅列した作品のうち前三篇は昭和十三年八月刊行の第一詩集「思弁の苑」に（本稿末尾に掲載した「士族」も同集所収）、後一篇は昭和十五年十二月刊行の第二詩集「山之口獏詩集」に、それぞれ収録された。「思弁の苑」「後記」によれば「思弁の苑」に収められた作品は（作品の配列を、巻尾の方から巻頭へと製作順にして置いた）という。そうであるならばここに列記した詩篇は詩集収録形態から見てもまず「大儀」↓「光線」↓「食ひそこなつた僕」↓「士族」の順に制作されたことになろう。すべてが平易な言葉で書かれ日常生活のときどきの心情を独自の口調で鮮やかに表現して見せた好篇と言える。

「大儀」は現在の複雑な人間社会に翻弄されているわたしたちにとって、実に、現在のわたしたちの心境を無理なく代弁してくれているように思う。（「躰づいたら転んでみたい」へする話も咽喉の都合で話してみたい）（誰とでも逢へば直ぐに、さよならを先に言うて置きたい）——これはわたし個人の当座の心境かもしれないけれど繁雑な社会で生きている大方の現代人が少なからず心の片隅に保有している普遍的な心情であろう。そしてかような心情は己を取り巻く環境が「生」への否応ない突入を強いていけばいるほど、また、人と人との関係が緊密であればあるほど胸中即座に頭をもたげてる、いわば、自己救済の感情と言える。むろんそれは社会からの無気力な逃避ではない。個人の在り様としての「ものぐさ太郎」的そ

れなのだ。故にわたしは「ものぐさ太郎」を否定しようとは思わない。それよりむしろ、このように、日々を己の生きたいように生き、寝たいように寝、食べたいように食べることの貴重さをハッキリと肯定したい。そしてかように思うことが、作品の背後で、世間に傷つき、なげやりになって、ふてくされている、一人間の存在を救済する唯一の手段だと思ふ。

この山之口獏の作品には「生」の激しい感動は微塵もないであろう。あるいはまた社会への鋭い批判もないであろう。あるのは己の全存在をひたすら（沈澱）させようとする（大儀）な気分だけだ。それは、他方で、読むものをして詩を書く詩作行為すらも（大儀）そうに思わせる詩作上のトリックのようにも見える。その点、文末表現（・・・のである）の終始にわたる繰り返しは作品そのものの基調をけだるくさせるに十分な音的效果を発揮していよう。そして、実は、この語調こそが、詩人山之口獏の詩作上の最大の特徴なのだ。よく言われるように深刻な内容を文体の粘着力によって一見ユーモアな身振りにすり変えてしまうそのからくりがここには巧みに設定されていると見てよい。そしてそれは、程度の差こそあれ、ここに列記した作品全てに共通する特徴のように思う。

（親兄弟を食ひつぶした）（女を食ひ倒した）（僕をまるのみにした）（「食ひそこなつた僕」）——かような内容自体、やはり、それを生きてきた詩人にとって手痛く痛烈な表現だろう。が、どこか、それは、滑稽でひょうげてはいないか。あるいはまた（往つたり来たりが能なのか／往つたばかりの苦なのに／季節顔してやつて来る／来るのもそれはまだよいが／手を振り／擧丸振り／まる裸）（「士族」）「思弁の苑」収録本文）という表現はどうであろう。

無一文の詩人にとって、おそらく、厳しい冬の到来は忌まわしいことに相違ない。しかし、かような心境をこのように表現して見せる詩人の手法というものには深刻さをどこかに置き去りにさせるようなそのようなユーモア感覚が十分に溢れているように思える。

昭和十四年十二月二十五日、木炭が配給制となった。正月を間近に控えた寒い時期に配給制度は人々の実生活にどのような心理を強いたのだろうか。このような意味では「炭」という作品は「火のないところに煙を立てた」ヤミ時代の鮮やかなカリカチュアといつてよい。

（物資の欠乏がもたらすいぢばん悪い作用は、心理的な飢餓に追いこまれることである。この飢餓の心理がどこまでもこうじた場合、どんなことになるか。それが戦争の悪である。「炭」はこんな回想にさそうが、この詩が作られたころは、まだ物資はいくらかあったのだろう。だがそれは商店の店先に並べてあったのではなく、どこかにこっそりと隠されてあった。有るような、無いような、そんなあいまいな状態であった。ヤミが当たり前のことになったのはこのころからで、金があって顔がきかなければ、食糧も薪炭も手にはいらない厄介な時だった。その有るような無いような状態のところへ、山之口獺が炭を買いに行った。炭屋のおやじは炭は無いという。買手のほうは有るとにらんでいる。その駆け引きに一篇の興趣があるといつてよいが、そこに生じる「有る」「無い」の問答とその歯がゆさをあらわすために、作者は同質同語、または類似のことばをいくつも重ね、もやもやした感じを出している。いったい炭は有るか、ほんとうに無いのか。ヤミ値を出せば売ってくれるのか。金があつても顔がきかねば売ってくれないのか。それともこちらを、ヤ

ミ値以下に値踏みしているのか。そんなもやもやした、あいまいな状態だが、そのところを作者は巧みに表現している。「くろい手足と／＼くろい顔」をした炭屋のおやじが、自分のその黒さを忘れてしまい、相手の金と顔ばかりを勘定する様子は、それとしてヤミ時代のカルカチュアといつてよい。炭屋のおやじは黒を忘れているのに、買手のほうはその黒ばかりを見る。一方には黒を忘れた黒い手足があり、一方には命をつなぐための黒を追う目がある。作者は物資統制や配給制度の問題にひとことも言及しなかつたが、それが多くの人の暮らしを支配し、生活をガンジガラメにした事実を、作品の背後に浮きあがらせる）。

伊藤信吉の評である（註7）。ヤミ行為の始まりは昭和十三年六月に実施された綿製品の製造販売の制限に始まる。以後、新聞用紙制限令・石炭配給統制・米穀配給統制・石油配給制などを経て昭和十四年十二月に木炭の配給制が実施されることになった。かような物資統制の影響は長びく日中戦争と太平洋戦争への予感の中で人々の生活はむろんのこと、その心理にさえも（黒い）影を投げかけるようになった。このような現状を山之口獺は伊藤の言う（「有る」「無い」の問答）と（同質同語）（類似のことば）で巧みに描写して見せる。そのような点では、当時は、日中戦争期—いわゆる昭和十年前後の世相の一端を見事に諷刺して見せた一篇と言えよう。そして、かような、社会諷刺・体制諷刺はたとえ「紙の上」「加藤清正」などの一連の作品にそのもどかしい文体とともに獺独自の身振りを持って表出されてくるのだが、その具体的な内容についてはこれらの作品を一読していただきたい。

おわりに

初述したように今回の資料は「現代日本文芸総覧」によって知り得た情報である。「行動」「四季」「批評」「人民文庫」「詩原」——いずれも昭和十年前後を代表する雑誌であり、獺がどのような雑誌に自作を寄稿していたか、その現状を把握する上できわめて有意義な情報であったと思う。今後一層の発掘に努めたい。

註

- (1) この「総覧」は非常に便利だが多少の遺漏があるので厳密には現物を一見する必要がある。たとえば、本誌前号二十五号に紹介した「文藝」の場合、当総覧「下巻」四七八頁の昭和十年二月号の項には「数学」のみが掲載されているように記入されているがこの記入は誤りであり実際は「数学」という総題のもとに「座蒲団」「数学」の二篇が掲載されている。前号にはむしろ二篇を掲載した。また同様なことを言えば、今回の昭和十年九月号「行動」に掲載されている「食ひそこなつた僕」「光線」の二篇も雑誌目次では「食ひそこなつた僕」という総題で表記されている。ただし、この場合は「総覧」では二篇ともに記入されている。

- (2) 田辺茂一「『行動』のころ」(昭和四十四年十月号「三田文学」「手がけた同人雑誌」8)

- (3) 「行動」は突然の廃刊であった。いわゆる終刊号には廃刊の弁はない。「編輯後記」にもこれに相当する言葉はない。

- (4) 「批評」の同人はペンネームで寄稿している人が多くたとえば小田切秀雄(織田英雄)・佐々木基一(青木文象)などの存在は最近まで判っていなかったようである。昭和六十三年三月に刊行された小田切秀雄「私が見た昭和の思想と文学の五十年」「上」(集英社)一一六頁には次のようにある。(この雑誌についてのややくわしい研究が、紅野敏郎の「昭和文学の水脈」(昭和五八年一月、講談社刊)に収められている。ただし、紅野は織田英雄というのがわたしだといいことに気付かないで書いている。(略)わたしよりすこし早く同人になっていた佐々木基一は青木文象の筆名で、わたしは織田英雄の筆名で、それぞれ片々たる文章を書いていた)。

- (5) 平野謙「同人雑誌『批評』について」文学・昭和十年前後 五(昭和三十五年八月号「文学界」)

- (6) 高見順「昭和文学盛衰史 二」(昭和三十三年十一月・文藝春秋社刊)

- (7) 伊藤信吉「山之口獺」(昭和四十四年七月・角川書店刊「現代詩鑑賞講座 8」所収「歷程派の人々」)

(一九九〇・九月稿)  
——筑紫女学園短期大学講師——

「士族」(雑誌掲載本文)

往つたり来たりが能なのか  
往つたばかりの筈なのに  
季節顔してやつて来る

それが春や夏らの顔ならまだよいが  
四季を三季にしたいくらゐ見るのもいやなその冬が  
木の葉を食ひ食ひこちらを見い見いやつて来る  
両国橋を渡つて来る

来るのもそれはまだよいが  
どこから来るのであらうかなぜ来るか

第一ここは両国ビルの空室である  
たまには食つてもこのめしは たまにはみてもその夢が  
一から十まで借り物で  
血の気はないが手首足首と この生首は僕の物  
冬にも誰にもやれない物ばかり。

「士族」(『思井の苑』収録本文)

往つたり来たりが能なのか  
往つたばかりの筈なのに  
季節顔してやつて来る

それが 春や夏らの顔ならまだよいが  
四季を三季にしたいくらゐ見るのもいやなその冬が  
木の葉を食ひ食ひ こちらを見い見いやつて来る  
両国橋を渡つて来る

来るのもそれはまだよいが  
手を振り  
拳丸振り  
まる裸

裸もまだよい  
あの食ひしんぼうが  
なにを季節顔して来るのであらうか

第一  
ここは両国ビルの空室である  
たまには食つても食ふめしが たまにはみても見る夢が  
一から  
十まで  
借り物ばかり  
その他しばらく血の気を染め忘れた 手首、足首、この生首など  
あるにはあるが僕の物。

付記 引用詩の旧字体は新字体に、仮名遣い、文字間隔はそのま  
まにした。また、雑誌の確認にあたっては佐々木勉氏のお  
世話になった。記して感謝申し上げます。